昭和63年(1988年)6月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
6　JUNE, 1988　毎月10日発行　第98号

教皇様の声

観想生活は御聖体を要求する

〈観想修道女の方々〉

1 皆さんの召命は、わが主の特別な勧めとしてどの福音書にも記されています。主はこの召し出しを誰にでもお与えになるとは限りません。主は、皆さんが誓願をたてる清貧、貞潔、従順を誰にでも要求なさるわけではありません。「天の国のために独身でいること」(マテオ19・12参照)の理想を弟子たちにお示しになった後で、主は「これを理解できるものは理解せよ!」(マテオ19・12参照)と言っておられます。けれども、この一節ばかりでなく福音書全体が、ナザレトのイエズスの生きる御手本、至福八端が一つに統合された生活となっている、生きる御手本に従った生き方を私たちの前に開いてくれます。

2 愛する姉妹の皆さん! この国が皆さんの召し出しの証しを与えられていることに私は燃えるような喜びを覚えています。今日(…)私が申し上げたいのは、この召し出しは「主は限りなく愛された」という言葉の内容と特別な調和がとれているということであります。(…) 実際、皆さんは、この言葉に表われたキリストの真理を毎日の生活の中でずっと保っています。修道院の中での皆さんの観想生活、花嫁としての生活、犠牲的な生活は、とくに御聖体から生まれるものです。そして、その生活は特別な方法で御聖体へと向かうのです。たとえ皆さんが隠れた生活をしていても、その生活そのものが御聖体を宣言しています。皆さんの生活全体が御聖体、「限りなく」愛されるキリストの愛の秘跡を、修道院の壁や格子を通して宣言しているのです。

「御聖体の生命を生きるとは、自分自身の生活の小さな囲いから完全に抜け出してキリストの生命の無限大の中で成長することである。」この言葉は、少し前に私が列福したカルメル会員、福者十字架のテレサ・ベネディクタの言葉です。(エディト・シュタイン『自叙伝』)

3 御聖体を通して、皆さんはリジュの聖女テレジアのように毎日、自分の召命のまさに「心臓」の中にいるのがわかることでしょう。実際に教会の心臓は御聖体のリズムで脈打っています。このリズムこそキリストが「御自分の人々を愛し…限りなく愛された」その愛のリズムです。こうしてこの愛は続きます。大勢の人の心に抱きしめられて、愛するシスターたちの心に特別な方法で抱かれて続くのです。

この愛は時の果てるまで続くでしょう。そして時を越えて、愛が遺憾なくその姿を表わすことでしょう。真の神の満ち満ちた姿において。こういうわけで、「愛は最も偉大なものなのであります。」(コリント①13・13)

「(…) こうして、たとえ数多くの様々な使徒職が(…) 極めて重要であっても、それでもやはり使徒職の真の根本的な仕事は、依然として教会内で皆さんが何をする人か、そして同時に何者であるか、ということにかかっているのです。皆さん方一人ひとりについて次のような聖パウロの言葉を繰り返すのは特に適切であります。『あなたたちは死んだ者であって、その命はキリストと共に神の中に隠されているからである。』(コロサイ3・3)」(「贖いの賜」)

4 愛する皆さん、皆さんが世間から切り離されているのは外見上だけのことです。実際には、教会の秘義を通して世間の真只中に、浮世の現実の真只中に、お国の現実の真只中にいることにお気づきですね。皆さんがよく御存じのように、この現実は困難な苦しい緊張に満ちたものであり、時々は人間の弱さの結果である罪によって悪化した不確実さと人間的危機で一杯になっている現実です。しかし私たちは一人ぼっちではありません。(…)

修道院では個々の人の身分や地位は関心を呼びません。修道院では、人は愛しています。キリストが「限りなく」愛されたその愛で。この愛は福音書の言う「パン種」です。それは、人間の毎日の命、死を免れぬ人間の生命にとって必要なパンの練り粉をことごとく発酵させるパン種です。(マテオ13・33参照) 御聖体のような、不死のためのパンなのです。

皆さんがまさにこの「パン種」になってくださることを希望します。

(一九八七・六・八)

キリストの御心——世界を支える愛

◉ 永遠の丘の希望なるイエズスの聖心……。

正午の祈りのために集まる日曜日には、イエズスの御母と特に一致して、聖心への連禱を唱えます。

実に日曜日のお告げの祈りは、私たちと聖母との祈りの約束です。聖母のそばで、その御生涯の決定的な出来事となったお告げを思いおこすから。

そうすれば、この出来事の中心に聖心を見出します。それは受肉(託身)のとき以来、御子の人としての心と共に聖母の御心のもとで成長していった、神の御子の愛であります。

◉ この聖心は世界の望みでしょうか。

私たちの回りをありのまま見つめるなら、聖ヨハネの述べるごとく、世界が肉の欲、目の欲、生活のおごり(①ヨハネ2・16参照)に屈していることを認めざるを得ません。

こうしてみると、世界はイエズスの聖心の望みからほど遠いように思われます。主の御望みを望みとしていないから。また無関心であるだけ

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12—6
☎(0797)31—3452

でなく、たびたび主に対し敵意さえ見せます。

これこそ公会議に述べられている「罪の奴隷状態に陥った」世界です。(『現代世界憲章』2)　公会議はすべての啓示に基づき、すなわち聖書、聖伝、それに私たちの経験に基づいてこう教えます。

◉けれども今日、この同じ世界は創造主の愛によって存在を受けました。そして主は愛で世界の存在を絶えず維持しておられます。見えるもの、見えざるものを含む被造物の総体、とりわけ「人類全家族と、この家族がその中で生活している諸現実の総体」(『現代世界憲章』2)について考えておいでになるのです。確かに「罪の奴隷状態」にいる結果、聖パウロが言うように、この世界は腐敗に陥った世界、それゆえ切なるあこがれをもって神の子らのあらわれを待ち、なげきつつ陣痛の苦しみにあっています。神の子らの自由と光栄にあずかるためには、これ以外に、腐敗の奴隷から実際に救われる道はないからです。(ローマ8・19～22参照)

◉罪と三重の情欲に支配されている世界ではありますが、マリアの御子の人としての心に満ちた愛に向けられていることもまた、事実です。

ですから聖母に一致してお願いしましょう。永遠の丘の希望なるイエズスの聖心、われらの心を導き給え。御身の十字架と御復活、福音に、すなわち御身の聖心に見出せるあの自由を、現代に引き寄せ給え。御身の聖心にある自由に！(八六・七・二〇)

聖霊降臨は教会の時代の始まり

1「今私は私を遣わされた御方のもとに行くのにあなたたちの中には『どこに行くのですか』と聞く者もいない。こう話したのであなたたちの心は悲しみにあふれた。私はあなたたちに真実を言う、私が去るのはあなたたちにとって良いことである。私が去らぬならあなたたちには弁護者が来ないからである。しかし去ればそれを送る。」(ヨハネ16・5～7)

十字架上での受難と死を目前にしてキリストが仰せになったこの言葉は、教会が主の昇天の準備をしている今、完全な意味を示すばかりでなく、その実現は間近に迫っています。

2受難の前日に主が弟子たちに話されたあの喜びが近づいているのです。「あなたたちは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」(ヨハネ16・20)　それは教会の誕生を見る喜びです。教会はキリストの出立(たつ)(天に昇られるの)を悲しむでしょう。しかし、真理が力であることを経験する聖霊降臨の時、弟子たちは人間的な考え方や弱さを乗り越えてキリストの復活を証言し、その悲しみは喜びに変わることでしょう。

聖霊降臨と共に人類史の中での教会の時代が始まります。「時が満ちた」という時は、聖霊により懐胎した処女マリアからお生まれになったキリストと共に始まりましたが、それは教会の中で今も満ち続いているのです。

3高間のメッセージには、すばらしい秘義がこめられています。「私が去るのはあなたたちにとって良いことである。私が去らぬならあなたたちには弁護者が来ないからである。しかし去ればそれを送る。」(ヨハネ16・7)　これは鍵となる言葉です。時の中で働く御父と御子と聖霊、つまり測り難い三位一体の神の摂理を啓示する言葉です。人間が恩寵によって救いのため神のもとに立ち返る、つまり贖いの御計画のことです。

——託身によって神が人となるという代償を払って得た人間の立ち返り。

——人となった御子が十字架による死を経て天に戻られることを代償とした人間の立ち返り。

——神の御手によって成った人間と世界が、父なる神の御手に戻る、つまり神との交わりに立ち返ること。

——恩寵を通して永遠の御子によって、人間が神の子となって実現した立ち返り。

——聖霊による人間の立ち返り。

4「私は父から出て世に来たが、今や世を去って父のもとに行く。」(ヨハネ16・28)　私はこの世と離別してしまうわけではないけれども、「私は世を去る。」　私は聖霊においてこの世に残る。私は福音の真理のうちに、ユーカリスチア(聖体・感謝の祭儀)のうちに教会を通してこの世に残る。言葉と秘跡において、神との父子関係という恩寵において、すなわち、信仰と希望と愛を通してこの世に残る。

「私は世を去るが、この世から離れ去るのではない。いつになっても、人々から離れ去ることはない。」

私は人々を御父のもと、御父の住居に導こう。歴史を通して罪による抵抗と反抗が続くだろうが、それでも私は人々を御父のもとへと導く。

——キリストはこう仰せになったのです。

神の御母は私たちに先立って道を歩んでくださいます。私たちも「アレルヤの祈り」のうちにマリアに心をあわせ一つになりましょう。

(一九八六・五・四)

岩なるペトロ、選ばれた器・パウロ

◆「……子が何者かを知っているのは父のほかにはなく……」(マテオ11・27)このキリストの言葉は、フィリッポのカイザリア地方で語られた言葉と関連があります。イエズス・キリストはカイザリアで弟子たちに「人々は人の子をだれだと言っているのか」と尋ねられますが、その時シモン・ペトロが確かな答えを出します。(マテオ16・3)他の弟子たちが様々な答えをしたあとで、最後にシモン・ペトロが言います、「あなたはキリスト、生ける神の子です」と。(マテオ16・16)

「子が何者かを知っているのは父のほかにはない。」　そしてキリストはペトロに言われます、「あなたは幸いな人だ。その啓示は血肉からのものではなくて、天に在す父から出たものである。」(マテオ16・17)

父のみが、子としてのキリストを知る父なる神のみが、この啓示をヨナの子シモンに与えることができたのです。ただ父のみが、「血肉」から成る人間を神御自身の内に隠された父と子の神秘のうちにお導きになることができます。

「子が何者かを知っているのは父のほかにはなく、父が何者かを知っているのは、子のほかにはありません。」(マテオ11・27)子と父の神秘なのです。

◆この瞬間に、シモン・ペトロは「幸いな人」の一人となりました。父なる神から子の神秘を示され、子なるキリストから父の神秘を示される「幸いな人」たちの一人

説教・講話・書簡等の抄訳

となったのです。「天地の主なる父よ、あなたに感謝いたします。あなたはこれらのことを知恵ある人、賢い人に隠し、小さな人々に現わされました。」(マテオ11・25)

先ほどの告白によりペトロはこれらの「幼な児」、「小さな人々」すなわち、父なる神が子の神秘を知らせ、子が父の神秘を知らせる人たちの中に加わったのです。ルカによる福音書(10・21)にはイエズスが「聖霊によって喜びに身をふるわせた」と書かれています。フィリッポのカイザリアでペトロが信仰告白をした時にもキリストは全く同じような喜びを感じられたはずです。

ペトロの告白に続いて、「地獄の門もこれに勝てぬ」将来の教会の礎となる「岩」のことが述べられています。(マテオ16・18)また、「天の国の鍵」についても語られています。(マテオ16・19)この国は地上に誕生し、父が子を知り、子が父を知る、その知の力によって育っていきます。その知識が魂に根を下ろし、それに伴って聖霊における「喜び」が花開いた時に天の国は生まれるのです。

◆ 今日、全教会、特にローマの教会は使徒ペトロと、彼が「生ける神の子」キリストに命を捧げた日を思い起こします。本日は神が使徒ペトロのこの世での巡礼の最後と定められた日なのです。「血肉」たるペトロはその巡礼中に一度ならず人間の弱さを見せました。受難の際、主イエズスを否んだあとで、ペトロが激しく泣いたことを思い出します。典礼はペトロがエルサレムの獄中で死にさらされた時のことを示しています。しかし、人間ゆえの数々の弱さと迫り来る危険にもかかわらず、「天に在す父から出た」啓示はいつも「血肉」より強かったのです。それで、キリストは自らの教会をペトロという岩の上にお建てになったのです。(ペトロとは岩のことを意味します。)光と恩寵は常に――あの決定的な証しの日に至るまで――人間の弱さより勝っていました。

◆ 今日ペトロはパウロと同じように言えるのです。「私が注ぎの犠(いけにえ)として注がれ、帆を張って去るべき時はもう近づいた。私はよい戦いを戦い、走るべき道のりを走りつくし、信仰を守った。すでに私のために正義の冠が備えられている。かの日に、正しい審判者である主はそれを私にくださるであろう。ただ私だけではなくその現われを愛したすべての人々に。」(②ティモテオ4・6～8)

パウロ

パウロはもとの名をサウロと言い、キリキアのタルソで生まれましたが、彼こそ主の現われたことを喜んだ人でした。彼は大いに、熱心に、熱狂的とさえいえるほど主を愛しました。以前、迫害において示したのと同じようにひるまぬ強さで愛したと言えるでしょう。

サウロと呼ばれていた頃のパウロは、主の現われを語る人々を迫害していました。彼の心は、父なる神が御子キリストを、キリストが父なる神を啓示される「小さな人々」のちょうど反対側にいたのです。パウロはこの啓示を受け入れようとしませんでした。旧約の教えにあくまでも忠実を保ち、啓示を拒否していました。古い教えを無条件に守っていました。彼には「聖霊によって喜ぶ」ということがなかったのです。そのかわりにキリストとその弟子、またキリストを証しする人々に対して敵意と憎しみを抱いていました。

この感情は「主がパウロに近づかれた」日まで続きました。(②ティモテオ4・17参照)主は復活の力すべてをもってパウロに近づかれ、罰するのではなく改心させるために地面に打ちのめし目をくらまされたのです。そして私たちもよく知っているあの特異な出来事が起きました。毎年一月二十五日に教会が思い起こすことです。「それなのに主はそばにあって私を強めてくださった。それは私によって宣教が全うされ、(福音を伝え)すべての異邦人にそれを聞かせるためであった。」(②ティモテオ4・17参照)パウロは諸国に遣わされた使徒なのです。

◆ 幸いなるかな、シモン・ペトロよ。あなたはその名ペトロの示すように岩なのです。

幸いなるかな、サウロよ。あなたは「選ばれた器」なのです。(使徒行録9・15)

今日、ここローマにおいてあなた方二人の使徒としての旅路は合流し、頂(いただき)に達しました。地上での巡礼は終着点に至り、使徒としての証しは終わります。終わりと共に頂点でもあるのです。

世界の首都であったローマの中の別々の場所ではあっても、「主は――それぞれの使徒の――そばに」おられたのです。

この二人の使徒が生と死をもって示した信仰の証しにより、ローマは幸福で麗しい所と唄われています。(第一の晩課の賛歌)「幸いなるローマよ、お前は全世界の美に勝って麗わしい!」。また教父たちからは、ローマは慈悲の内に存在する所として敬われています。(アンティオキアの聖イグナチオ「ローマ人への手紙」序文参照)(一九八七・六・二十九)

イエズスの使命
罪からの解放
キリストシリーズ⑬

聖アウグスティヌスのテキストを手掛りにすると、キリストがなされた奇跡を救いの御力のしるしとして解釈することができます。

「キリストが私たちのために人となられたことは、キリストが私たちの中で行なわれた奇跡よりも私たちの救いに役立ちます。そしてまた、霊魂を損なう悪の治癒は死すべき肉体の病の治癒より重要です。」(聖アウグスティヌス「ヨハネ福音書註解」17・1)人々の救いと全世界の贖いのために、イエズスは肉体に関わる奇跡をも行なわれました。そこで今回は、「奇跡と不思議としるし」を通して、神との交わりへの招きを妨げる悪、不滅の霊魂を脅かす悪から人間を救う御力を示されたことを考えましょう。

カファルナウムの中風者が癒される場面にこれがよく表われています。中風の人を運んできた人々は、イエズスが教えを述べておられる家へ入れなかったため、屋根を壊して穴をあけ病人をつり下ろしました。病人は気がつくとイエズスの足元にいたのです。「イエズスは彼らの信仰を見て、『子よ、あなたの罪は赦された』と中風の人に言われた。」その場にいた人々のうちの何人かはこの御言葉を聞いて冒瀆(ぼうとく)の疑いを抱きました。「あれは神を汚すことばだ。神以外に罪を赦せるものはない。」イエズスは人々の考えを見抜いて言われました。「中風の人に(あなたの罪は赦された)と言うのと、(起きて、床を取って行け)と言うのとどちらが易しいと思うか。人の子が地上で罪を赦す権威をもっていることをあなたたちに知らせよう。」そして中風の人に向かい、「私は命じる。起きよ、床を取って家に帰れ」と言われると、「病人は起きてすぐ床を取り、人々の目の前を出て行った。」(マルコ2・1～12、マテオ9・1～8、ルカ5・18～26参照)「神を称えながら家へ帰って行った。」(5・25)

罪を赦す権能

中風の人を癒された奇跡は罪を赦す救いの御力のしるしでしたが、それをイエズス御自ら説明されました。

不変の教え

このようなしるしをなさったのは、世の救い主として来られたことを示すためでした。救い主の第一の仕事は、霊魂を損なう悪、人間を分裂させ、神の救いを妨げる悪、つまり罪から人間を解き放つことであったのです。

3 聖アウグスティヌスの言葉を手掛りに、キリストがなされた奇跡の中でも極めて重要な「悪魔の追放」も説明できます。マルコの福音書に記されていますが、ゲラサ人の地で汚れた霊につかれた人をごらんになったイエズスは、「汚れた霊よ、この人から出よ」と命じられました。(マルコ5・8) そこで特異な会話が始まります。「汚れた霊」はキリストの御言葉に恐れを感じ、キリストに向かって「いと高き神の子イエズス、あなたに何の関わりがありますか。神によってこい願います。私を苦しめないでください」と大声で叫びました。イエズスが「おまえの名は」と問われると、「私の名は軍団です。大勢だからです」と答えました。(マルコ5・7～9参照) 病を引き起こす肉体的、精神的要因をもつ不明瞭な世界に私たちは住んでいます。そこに悪魔という現実も入っています。人間の言葉でさまざまに表わされ述べられているのですが、それは神、ひいては人間に対立するものであり、悪から人間を解き放つために来られたキリストに対立するものでした。しかし「汚れた霊」でさえ思わずイエズスの御前で、邪悪ながら理性的な知性をもって「いと高き神の子」と認めたのです。

4 マルコの福音書にてんかんの息子が癒された出来事があります。福音史家の記す症状(「口から泡をふき、歯をくいしばり、体を硬直させる」)はこの病気の特徴を示していますが、この息子の父親は、悪魔につかれていると言って息子をイエズスのもとに連れて行きます。悪魔によって息子はひきつけを起こし、地に倒れ、泡をふいて転び回っていると言うのです。このような症状に悪魔が入り込み働きかけることは可能です。確かにイエズスは息子のてんかんを癒されたのですが、「唖と耳しいの霊よ、私は命じる。この子から出て二度と入るな」という命令で癒されたのは意味深いことです。(マルコ9・17～27参照) ここでイエズスの御使命と、悪霊から人間を完全に解放する御力を再び確信します。

5 イエズスは、御自分の使命が人間を悪、そして何よりも霊的悪である罪から解放することを示されました。人間の歴史における悪の張本人・悪霊との闘いを示すことでした。福音書の中でイエズスが繰り返し述べておられるように、それがイエズスの御働き、使徒たちの働きの意味することでした。ルカの福音書に記されています、「私は天にひらめく稲妻のようにサタンが落ちるのを見た。私は……敵のすべての力を踏みつける力を授けたのだから、もう何者もあなたたちを損なうことはないだろう。」(ルカ10・18～9) またマルコの福音書でイエズスは、「宣教に送るために」12人を決め「悪魔を追い払う権威を与えられた。」(マルコ3・14～15) さらにルカの福音書には最初の宣教から戻った72人の弟子がイエズスに、「主よ、あなたの御名によれば悪魔さえも私たちに服従します」(ルカ10・7) と報告したことが記されています。

罪と罪を生み出すものに勝る人の子の御力が、このようにはっきりと示されているのです。イエズスの御名は救い主を意味します。悪魔もその支配下にあります。しかし、イエズスの救い主としての御力が完全に実現したのは十字架上の犠牲においてでした。十字架はサタンと罪への完全な勝利でした。それが御父の御計画です。十字架上の辱しめを通して復活と生命の栄光をお受けになることによって、神の御計画が実現したのです。このような逆説の中に、「十字架の御力」と呼べる神の御力が光り輝いています。

6 罪の結果である死に対する勝利も救いの御力の一部であり、「奇跡と不思議としるし」によって明らかにされたこの世の救い主の使命に属することでした。罪と死への勝利は、ナザレトからカルワリオへと向かうイエズスの救い主としての使命の道を示していました。死に対する勝利への旅を示す「しるし」として、特に人々が死からよみがえった出来事をあげることができます。救い主なのかと尋ねた洗礼者ヨハネの使いに対してイエズスは、「死人はよみがえった」(マテオ11・5) とお答えになりました。(マテオ11・3参照) イエズスによってさまざまな人人がよみがえりましたが、中でもベタニアのラザロの復活は注目に値します。ラザロの復活は、いわば罪と死に対する決定的な勝利となったキリストの十字架と復活の「前触れ」でした。

7 福音史家ヨハネがこの出来事を詳しく記しています。最後の場面を見れば充分でしょう。イエズスは墓を閉じていた石を取りのけるように言われました。(「石を取りのけなさい。」) 死人の姉妹マルタは死んで四日も経っていて臭くなっていると言ったのですが、イエズスは声高く「ラザロ、外に出なさい」と呼ばれます。「すると死者は出てきた。」(ヨハネ11・38～43) この出来事を見た多くの人がイエズスを信じました。しかしある人々は衆議所に行きこれを告げました。司祭長とファリザイ人は、ローマの軍隊がどう動くかを考え恐れました。(「ローマ人が来て、われわれの聖なる地と民を滅ぼすだろう。」(ヨハネ11・45～48)) その時カヤファが沈黙を破りました。とてもよく知られている言葉です。「あなたたちは何一つわかっていない。一人の人が民のために死ぬことによって全国の民の滅びぬほうがあなたたちにとってためになることだとは考えないのか」と。「彼は自分からこう言ったのではない。この年の大司祭だったので、預言したのである」と福音史家は記していますが、どのような預言だったのでしょうか。ヨハネがキリスト教的な意味を説明しています。「イエズスがこの民のために、また、ただこの民のためだけでなく、散っている神の子らを一つに集めるために死ぬはずだった」と。(ヨハネ11・49～52参照)

8 ヨハネによるラザロの復活の記述には、この奇跡のもつ救いの意義が明らかにされています。決定的な表示です。衆議所がイエズスを殺そうと決めたのは、その時からだったのです。(ヨハネ11・53参照)

「この民のための」、「散っている神の子らを一つに集めるための」、この世の救いのための、贖いの死となるものでした。その死が、死に対する勝利になるものであることをイエズスはすでに述べておられました。ラザロの復活の時、マルタにはっきりと仰せになったのです。「私は復活であり命である。私を信じる者は死んでも生きる。生きて私を信じる者は永久に死なぬ。」(ヨハネ11・25～26)

9 最後に、再び聖アウグスティヌスの言葉に戻りましょう。「われらの主、救い主イエズス・キリストが行なわれた事をよく考えてみれば、奇跡的に見えるようになった盲人の目は死によって閉じ、奇跡的に治った足なえの足は死によって動かなくなることがわかります。死すべき肉体において一時的に癒された全てのことは最後にはもとに戻ります。しかし信じた霊魂は永遠の生命に入ります。弱い人間において、主は信じた人に偉大なしるしを与えてくださいました。主は罪の赦しのためにこの世に来られ、十字架の辱しめによって人間の弱さを癒してくださいました。」(聖アウグスティヌス「ヨハネ福音書註解」17・1)

そうです、「奇跡と不思議としるし」を行なわれたのは、御自分が救い主、神の子であることを示すためであり、人間を罪と死から解放する御力を有する唯一の御方、真のこの世の救い主であることを明らかにするためであったのです。

『教皇様の声』 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部七十円送料四十円 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393